

## コロナ禍を超えて ～ with- から post- ～

公立千歳科学技術大学

理工学部長 吉本直人

読者の皆様におかれましては、日頃より公立千歳科学技術大学の教育や研究成果に対するご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。さて、この数年世界中で猛威をふるった新型コロナウイルスも、感染症法上の位置づけが2023年5月にインフルエンザと同等レベルである「5類」に変更されることになりました。ようやく待ちに待った「平常」が大学生活にも戻ってくることとなります。振り返れば、緊急事態宣言に伴い教育や研究活動はもちろん、日々の生活においてさえ、誰もが経験したことのない状況が続く中、本学の教職員たちは、新型コロナウイルス感染症の対策や予防に取り組みつつ、教育・研究活動の継続とその質の維持に尽力してまいりました。一方で、学生たちは課外活動などが制約され不自由なキャンパスライフを強いられつつも、ハイフレックス型やビデオ・オンデマンド型などの新しい授業形態に対して柔軟な適応力を示していました。また、オンラインによる研究発表や就職説明会・面接などの新しい試みについても経験をしてみいました。こうした経験の中で、得られたものとして新たなコミュニケーションのありかたが挙げられます。ネットワーク技術を用いた遠隔でのテレコミュニケーションは、技術的には従来からあったものですが、社会全体で認知され、個々人の行動様式としての選択肢が増えたことに意義があると思います。これによって、移動の制約からの開放による時間的な選択肢の増大のみならず、働く場所や学ぶ場所などの空間的な選択肢を増やすことを可能としました。教育においては、きっかけは強制的ではあったものの前述したハイフレックス型やビデオ・オンデマンド型などの新しい授業形態を実行することにより、従来のe-ラーニングとは異なった教育効果を知る機会を得ることができました。今後は、対面型とオンライン型との併用によるブレンド型の授業形態などを試行することによって一層の教育の質の向上に繋げていきたいと考えております。研究活動においては、多くの学術会議がバーチャル化しましたが、これは遠隔からも自由に参加できることを意味しております。地方の大学にとっては、移動にかかる時間とコストに関するハンディキャップを解消し、研究成果の発表する良い機会となりました。一方で、失ったものとして部活動などに代表される人と人とのリアルな繋がりや体験が挙げられます。具体的な影響は今後の調査を待つ必要がありますが、在学生へのケアのみならず今後の新入生においてもコロナ禍が残した影響をしっかりと検証してケアすることが求められます。未曾有な災難であったコロナ禍でしたが、様々な制約が新たな必要性を引き起こし、それが創意工夫と新たな試みを生み出したことは、post コロナ時代にも繋げなければいけません。平常な生活が戻ってきてからも、自ら「問い」を立てることにより必要性を喚起し、創意工夫を続けていくことを願ってやみません。最後に、本紀要を通じて本学の活動の一端をみなさまにご理解いただけることを祈念しております。